

いはどの程度なら許されて、こっからは認めないという、こういうふうな論の立て方のほうがむしろ今後の教育政策を論じる上でいいのではないかと考えているので、この点についてボール先生はどう考えておられるかというのを聞きたい。どうもまとまりがなく、羅列的で申し訳ないけれども、日頃思っている質問をすべてはき出させていただきました。

ボール: どうもありがとうございました。大田先生は非常に興味深く、難しい問いを投げかけてくださったが、真剣に受け止めてもらえるというのはいつも喜びであるので、これからお答えしたいと思う。

ではまず、イングランドでミドルクラスは誰なのかということであるが、少しわかりやすくするために、黒板に絵を描きたいと思う。

大田先生が先ほど言及しておられた本の中で、私はジョン・ゴールドソープ (John Goldthorpe) のサービスクラスという考え方を紹介している。サービスクラスというのはミドルクラスの一部にあたるわけだが、中間ミドルクラス (intermediate middle class) と言われる人々は除外している。この中間ミドルクラスというのはどういうグループかということ、ホワイトカラー労働者であるが、グループでルーティーンワークをこなしているような、事務あるいは秘書といった職業の人たちで、他者が決めたことに服従しながら仕事をするスタイルで働いているミドルクラスのことである。私達はサービスクラスというひとつの部分に着目し始めているのだが、合衆国であれイギリスであれ、ひとつのディヴィジョン、枠組みの中にさらに細分化されたグループが見出されるようになってきている。サービスクラスの中のさらに細分化されたこの部分 (Class fraction) に着目することによって大田先生が投げかけておられる他の問いにもお答えすることが出来ると思う。

このサービスクラスの中にある部分に着目する際に、3種類のことに気づくことになる。それは、構造的違い (Structural differences)、規範的違い (Normative differences)、関係性における違い (relational differences) である。構造的違いというのは職業の違いである。規範的違いというのは価値、信念、ライフスタイルに関わる違いである。それから関係性の違いというのは社会的なネットワークや友情関係をどういうふうに結んでいるかということに関するものである。しっかりと形成された断片、フラクションというものを特定化するには、この3つの種類における違いというものが見出されるときに、しっかりとしたフラクション (派) が形成されているといえる。イギリスではマイケル・サベージ (Michael Savage) とかティム・バト

ラー (Tim Butler) の研究者グループがこのフラクシオンについて研究を行っている。彼らによれば構造的、規範的、関係的違いという3つの基準を適応してこの社会階層におけるフラクシオンというものを観察した場合、恐らく2つか3つのサブグループを見つけることが出来る。彼らは、これらの3つのグループをリベラル美学型 (liberal aesthetics)、企業または管理職型 (corporate or managerial middle class)、そして非常に良く混合された (hybrid mixed) されたグループであるポストモダン型 (post modern middle class) と呼んでいる。

リベラル美学型といわれている人々はリベラルな専門職についている人々で、具体的には医師、弁護士、大学教授、社会福祉などで働く人々である。その人たちは非常に自立的に仕事を進めることが出来る人々である。それに加えて、古いタイプのメディアで働く人々、ジャーナリストや執筆者という人々もこのグループに含まる。管理職型のグループに分けられている人々は、呼び名どおりであり、会社の上級マネジャー (senior managers) であるとか、財政面で働く人々、銀行員、会計士などという人々が含まれている。ポストモダン型と呼ばれている人々は、シンボリック・アナリスト (Symbolic analysts) と呼ばれている人々で具体的にはIT関係で働く人、広告、公的な関係を操作するような仕事をしているような人々を指している。

最初は職業によってこのグループを特定化しているのであるが、彼らがどのようなものを消費しているかを調査してみると、お金の使い方、時間の使い方、商品の買い方にも違いがあるであろうし、ライフスタイルにも違いが見られるということが分かってくる。具体的にはどのようなものを買っているか、レジャーの過ごし方、食べ物、どのような映画をみるか、どのような音楽を好むかといったところに違いが見出せる。調査によると彼らは飲み物さえ違う。管理職型はウイスキーを多く飲むし、リベラル美学型の人たちはワインを多く好む。

ポストモダン型の人たちは、あまり明瞭な区別がされるものではない。リベラル美学型や管理職型の人たちは非常に大きな対照が見られるわけだが、ポストモダン型の人々はもう少し曖昧な存在である。彼らは文化的オムニブルといわれる。オムニブルというのは何でも食べる化け物で、どんな文化でも吸収してどんどん食べてしまう存在である。

3種類の人々は、それぞれまた別の種類の遺産を受け継いでいる。一つ目が文化資本、教育的な資本である。それはどのような学校で教育を受けたか、また家庭でどのような教育を受けているかに関わる。二つ目が組織的なキャピタルで、どのような投資がなされているか、どのような評判を得るような組織に関わっているか。そして3つ目が

もちろん、経済的な遺産、どういう収入を引きついでいるかということである。先ほど申し上げてきた異なるフラクションのグループは、それぞれ別の遺産に大きく依存している。リベラル美学型のグループは文化資本に非常に依拠しており、文化資本の特徴として持ち運び可能である、いったんそれを蓄積したらいろんな職業をわたる歩くことが出来るという特徴が見られる。管理職型は、より組織的なキャピタルに依存している。特定の会社に属することによって得られる資本なのだが、彼らはたとえば一つの会社から一つの会社に移動するとか、あるいは、他の専門職に移動するというのがより困難であり、この資本はあまり持ち運びが可能ではないという特徴が見られる。管理職型の人々は経済的資本をたくさんもっているが、リベラル美学型のグループは経済的な遺産をどの程度引き継いでいるかに差が見られる。医者や弁護士といった人々は非常に高い収入を得られるが、低い収入を得ている人々もいる。たとえば大学の教授など。ポストモダン型は非常に不明瞭で、それぞれ3つの資本に関わっている度合いというのは様々である。仕事の様子とか、資本の持ち方も非常にバラエティに富んでいるというのが現実である。

関係的な側面については別の問いに答える際に触れることにして、以上がイングランドにおけるミドルクラスとは誰なのかということに対する私の長い、複雑な答えである。

この説明はみなさんに何らかのイメージを与えているだろうか。これらすべてのことが公的なことであるとか、コンプリヘンシブスクール、あるいは社会民主主義にどう影響していくのかということを考えながら第2、第3の問いに答えていきたいと思う。そこで middle < classes > と複数形で話していきたい。

異なるミドルクラシーズの断片のグループの人たちは、それぞれ公的部門に対して、その質をどう考えるか、どういう役割を考えるかについて異なる立場に立っている。そこで、キャロル・ビンセント (Carol Vincent) という同僚と過去2,3年にわたってロンドンのふたつの地域で行った研究について紹介していきたい。このふたつの地域というのは、ひとつは南ロンドンのバタシー (Battersea) で、もうひとつは北ロンドンのストーク・ニューイントン (Stoke Newington) である。偶然なのだが、私自身がバタシーに住んでいる。このふたつの地域を選んだのは、前の調査からこのふたつの地域がそれぞれ異なる種類のミドルクラスに偏った人口構成になっていることが明らかになってきたからだ。バタシーは国際的な銀行も含んだ、ファイナンシャルな仕事をしているミドルクラスが多く、その多くはドイツ銀行、ス

イス銀行などの国際銀行で働いている。

対照的にストック・ニューイントンではたくさんのリベラル美学型の専門家たち、メディア関係の人々が住んでいる。法律家、医師、とくに法律家については刑事法、犯罪者に対する関係の弁護士の人々、それから建築家、大学の講師、劇作家、BBCで働くジャーナリストの人たちがたくさん住んでいる地域である。したがって、バタシーのグループは管理職型に属し、ストック・ニューイントンのグループがリベラル美学型のグループに非常にマッチしている。それぞれが違ったグループに属しているので、先ほど述べてきた側面についても違いが見られ、バタシーの人々は比較的高い収入を持っているし、それに起因して規範的な違いも見られる。ストック・ニューイントンの人々というのは、公的な参加により熱心な人々である。政党へ参加もするし、社会的運動、たとえば、「グリーンピース」とか「地球の友」といったようなNGOにも参加している。それに対して、バタシーの人々はより私的な解決の仕方を求める。よって、社会的な部門に働きかけるより、家庭内で解決しようとする傾向が見られる。バタシーの親達は子ども達を私立学校に送ることに熱心であるし、公立学校に対しては非常に大きな不安を持っている。それに対してストック・ニューイントンの親達というのは、公立学校に対する支援を行うのにより熱心である。とくに小学校段階に対しては即座にサポートするという姿勢が見られる。ただし、中等学校に対しては多少、より不安を感じているという部分があるが、コンプリヘンシブスクールの理念に対しては非常に支援的な発想をとる。

バタシーの親達というのは、排他的な発想をする。自分と違う社会グループをなるべく除外して生きていきたいとする発想をしている。よって、私立学校においても自分達の社会的ネットワークの中で生きていこうとする。それに対して、ストック・ニューイントンの親達というのは、もっと統合的な発想をする人たちで、混ざり合って存在していることに大きな価値を置く人々である。バタシーの親達が異なる社会グループの人々を「彼ら」、別者というふうな呼びかたをするのに対して、ストック・ニューイントンの親達は他者をむしろ資源として見る。つまり、彼らの子どもの教育経験において社会的に存在して多様性を学ぶ資源として捉える傾向がある。アメリカの哲学者であるトーマス・ニゲル(Thomas Nigel)の言葉を使うなら、バタシーの親達というのは、圧倒的な優勢事項を個人的な見地に置く。それに対して、ストック・ニューイントンの親達というのはニゲルの言うところのインパーソナルなもの、非個人的な見地を重視しており、それはより一般的な社会的な価値、福祉といったものを重視する姿勢に現れている。この地域を選んで暮らしているということ自体が彼らの価値

を表している。

バタシーという地域はつい最近、ミドルクラスの人々によって占有的に暮らされるようになってきているのだが、それは社会的な囲い込み (enclave)、自分たちの領分を囲い込むような姿勢であるといえる。この地域に住んでいる人々の大半が白人でミドルクラスの人たちである。私達のインタビューに答えてくれた保護者が非常に端的にそのことを説明してくれた。私達の隣は会計士で、大体この周辺に住んでいる人はみんな会計士なんだというふうに述べている。それに対してストーク・ニューイントンの地域には非常に民族的な多様性があるし、貧困も見られる。ミドルクラスと同時に移民、難民の人々もたくさん暮らしている社会的に多様な地域である。

よって、この二つの地域において、異なる種類の所属観があり、異なる種類の語りというものがある。異なるタイプのグループというのは、教育に対しても異なるアプローチの取り方をしており、ストーク・ニューイントンの保護者達とは公立学校、コンプリヘンシブ教育、社会的な混合を強調するのに対して、バタシーの人々は私立学校、分離している排除的な教育を支持する関係にある。

さらなる調査がもちろん求められが、この二つの事例から、彼らは民主主義に対しても、シチズンシップ (市民のあり方) に関しても異なるコミットメントをしているという証拠が見られると考えられる。バタシーの親達は恐らくネオリベラルとっていいだろう。競争とか、個人主義というものを非常に強調するグループで、公的なものとか、他者に対する配慮といったものには強調点を置かない。それに対して、ストーク・ニューイントンの親達というのは、どのようにネイミングするか難しいのだが、アメリカの民主主義の理論を引き合いに出せば、シビック・リパブリカンと言える。彼らは公共善や人々のニーズにより強く関心を持ち、市民社会に対する参加というものを非常に重視するし、社会の改善や公共的な福祉のために働くということに熱心で、自分の家族のためだけに働くというような排他的な考えを持たない。

彼らはまた、選挙においても異なった投票行動をするという特徴が見られる。バタシーの親達の考えはサッチャーの考えに似ている。サッチャーはみなさん良くご存知のとおり、この世には社会などというものはないのだ、あるのは個人と家族だけであると言っている。このような社会に対する捉え方というのは、バタシーの親達に非常に良く代表されている。それに対して、ストーク・ニューイントンの親たちというのは、すべての人がそうだというわけではないが、社会全体を良くしていく活動、環境的運動であるとか、政治運動というものに関わろうという姿勢が強く見られる。

これらの例から明らかになってきたのは、ミドルクラスの中にも断片化された

グループというのがあって、少なくとも欧米においては複数のミドルクラス (middle classes) というのが存在しているということを前提に議論しなくてはならないのではないかとということがお分かりいただけたと思う。

大田先生の4番目の質問である、このようなグループの違いが、教育及び福祉国家の変化とどのように関わってくるのかをお話するが、ここで2つのことを指摘しておきたい。ひとつは、グローバリゼーションがどちらのグループにも関わっているということである。このことは、国家を超えた傾向としてあるのではないだろうか。これはアメリカの経済学者であるロバート・ライク (Robert Reich) が、国家を超えたミドルクラス (transnational middle class) と呼んでいるものである。非常に大きな会社の幹部クラスの被雇用者達は国家を越えて仕事をするようになっている。その結果として、彼らは国家というものに対して、ほとんどあるいは全く所属意識をもっていない。彼らの収入は子どもを私立学校に送るのに十分だし、健康保険がなくても私的に解決していける資産を持っている。ある意味、彼らは社会から外へ出て行ってしまった個人、ないし家族であり、ある場所では、彼らは物理的に他の社会から分離され、門に囲まれたコミュニティ (gated community) の中にいるという存在になってしまっている。

この門に囲まれた閉鎖コミュニティは西欧であれ、開発途上国であれ、一般的になりつつあり、彼らのコミュニティは高い塀で囲まれていて、恐らく入り口には門番が居て、貴方が訪問しようと思うと門番に貴方が誰かを言わなくてはならない。ラテンアメリカでは実際に門で囲まれたコミュニティの中に学校も店もあって、全く外部の周辺と交流をしなくても生きていける環境が整っている。しかしながら、われわれは彼らのコミュニティについて少ししか知らない。これが世界的に拡大している傾向からすると、これに関して研究を進める意義があるのではないか。

もうひとつ指摘しておきたい点があるが、それについては非常に簡潔に述べるだけにしておきたいのだが、それは、ここに見られるコミットメントや、価値観、信念は、なんらかの社会的真空状態の中に存在しているというわけではないということだ。これらは支配的な政治的ディスコースによって影響を受けている。この政治的ディスコースはまた、ミドルクラスに対する異なった刺激 (incentive) のシステムを生み出している。1980年代から、あきらかに英国やヨーロッパにおいて、我々が見てきたものは、このようなミドルクラスのネオリベラルなバージョンに力点を置いた政治的ディスコースであった。このことは以下のような意味を持っている。すなわち、しばしば、このグループは曖昧さ、ディレンマ、不確実性といえる特徴を持つ。なぜ

なら、彼らが持つ価値観は、必ずしも支配的ディスコースにおいて代表されるものである必要はないからだ。そのことは、彼らがどのように行動したらいいのかということに関して、居心地の悪さや倫理的ディレンマを生み出す。

すべての問いに答えることはできないが、とりあえず、問い4に答えるために、このようなミドルクラスの変化が公的な教育、福祉において、少なくともヨーロッパとアメリカでどのような変化が起こっているかを説明し、その後、日本でも似たような傾向があるのかどうかを伺いたい。

ここには、古いタイプの福祉から新しいタイプの福祉への転換がある。古いタイプの福祉というのは、普遍主義に立っていて、構成というものを重視し、社会的賃金 (social wage) を重視するようなタイプの福祉である。ある意味、古いタイプの福祉というのは、ワーキングクラスのための福祉を意識していた。それに対して、新しいタイプの福祉というのはミドルクラスのニーズや関心により重点を置いている。これはミドルクラスの数が増えたからでもあるが、起こってきている問題に対応していて、それはミドルクラスの社会的福祉に対するコミットメントを維持しようとする、何らかのかたちでミドルクラスの利益に対応しないと維持できないという事態が生じているからである。

ミドルクラスが気にしていることに関しては、三つの基準から捉えることが出来る。ひとつめはサービスのスタンダードである。どれくらいのサービスが提供されているかということに関心がある。このことは、社会善、社会的保障が質の高いものであるということをもミドルクラスに納得させるためのものであり、その議論の一部としてはアカウントビリティ、成果についての説明責任、それから比較可能な形で成果を明らかにしていった透明性を確保するということに関わっている。

2つ目の基準は、新しく使われてきている「パーソナライゼーション」、個人対応主義というものに関わっている。これは普遍的な社会的サービスの中で、あなたは自分だけの特定のサービスを受けることができる。誰とでも同じようなサービスではなくて、個人的なニーズにあったサービスが受けられるようにしてほしいという欲求である。このパーソナライゼーションについてもっと知りたい方は、チャールズ・レッドベター (Charles Leadbetter) が書いている『パーソナライゼーション *Personalisation*』というパンフレットをご覧ください。これはニューレーバーに非常に関連の深いシンクタンクである DEMOS が出しているパンフレットで、その中にパーソナライゼーションという言葉が使われている ([www.demos.co.uk](http://www.demos.co.uk) からダウンロード可能 --- 大田)。

よって、教育大臣も最近では学校の中で個人対応、個別化された個別指導を強調するようになってきている。子ども達のそれぞれの特別なニーズに対応するための学習経験を保障していくという言説が語られている。

3番目の基準は、個人対応化に多少関連があるのだが、差異化ということである。これは他者に対するサービスとは区別してほしい、とりわけ危険な他者からは切り離してサービスしてほしいという要求のことである。ここで言う危険な他者とは、とりわけバタシーの保護者にとっては、ワーキングクラスの子供達で、彼らは自分の子供達がワーキングクラスの子供達と学ぶということを好まない。

このように、学校の教育の中で今では多様な教育ということが非常に語られるようになってきている。政府はすべての学校をスペシャリストスクールにすることを強調している。すべての学校で異なるカリキュラムを与えて、異なる労働市場に向けて用意させていくということを強調する。また、公立学校の中で宗教的要素を強調する信仰的な学校を強調するようになってきている。さらにアカデミーと呼ばれる学校があり、それはビジネスや宗教団体から支援を受けている学校であるが、排他主義的、個人主義的な保護者達に対して、貴方が望むなら特別な専門的な学校に通わせて、他者から区別された排他的な学校に子どもを通わすことができますよと言っている。また、学校の中でも差異化、多様化といった流れが強調されるようになってきていて、才能ある有能な子供達に対する教育提供、能力別学級編成、セッティングなども益々強調されるようになってきている。

これが問い4に答えようとした私の試みであり、現代的な国家においては、管理職型ミドルクラスが福祉国家に対してどういう関係をとろうとしているか、そして福祉国家が逆にそのグループを取り残さないために彼らのニーズに対応しようとしているということをお答えした。

問い5,6,7に対しては来年お答えしたいと思う。

上田：一通り質問に対するお答えを出していただいたということで、ここで休憩を入れさせていただきます。

西岡：セッティングは能力別学級編成ですので、説明を加えさせていただきます。

上田：後1時間ほど残されておりますので、有効に活用していきたいと思う。大田さんに対する質問でも、あるいはポールさんに対する質問でも、また違った意見を持つ